

## 災害時における住民の心得

### 第1 台風等に対する心得

#### 1 一般家庭の災害対策

##### (1) 台風等が近づく前の準備

ア ラジオ、テレビで気象警報、情報及び防災上の注意事項をよく聴取して、その内容に応じた対策をたてる。台風が近づくと、深夜でも気象情報が放送されるので、台風の位置、進路予想、暴風域等を確かめるようにする。

イ ハザードマップを利用し、自宅の危険性について確認しておく。

ウ 停電に備えて、懐中電灯、ラジオ、予備の電池等を用意する。

エ いざという時の避難行動を決定しておく。

オ 家の内外の安全確認をしておく。

(a) 雨どいに落ち葉や土砂が詰まっていないか。継ぎ目のはずれはないか。雨戸にガタツキやゆるみはないか。

(b) 屋根のひび割れ、外壁、ブロック塀の破損、亀裂はないか。トタンのめくれはないか。プロパンガスのボンベは固定されているか。

(c) 側溝のゴミや土砂を取り除き雨水の排水をよくしておく。

##### (2) 台風等が近づいてきたときの準備

ア 断水に備えて飲料水を容器に入れて用意をしておく。

イ 避難に備えて、貴重品などの非常持ち出し品の準備をしておく。

飲料水、食料、粉ミルク(赤ちゃんがいる場合)、救急医薬品、携帯ラジオ、懐中電灯、予備の電池、タオル・ティッシュペーパー、下着、現金、常備薬など、家庭の状況に応じて用意する。

##### (3) 台風が襲ってきたとき

ア 水害のおそれがあるときは、次のようにする。

(a) 家の中心部に近い、窓のない部屋や、がけなどの危険な場所から最も離れた部屋へ移動する。

(b) 窓、雨戸、カーテンを閉める。

イ 大雨が長く続くと地盤がゆるみ、がけ崩れが起る危険があるので充分注意すること。

ウ 堤防や護岸の近くに住んでいる人は、川や海の水かさには注意すること。

##### (4) 立退き避難するときの注意

ア 平素から避難所の場所と安全な道順とをよく覚えておく。

イ 市からの避難情報があったら、いつでも避難ができるよう準備する。高齢者や障害者などの要配慮者は早めに避難する。

ウ 避難情報は防災行政無線や防災情報メール、ラジオ・テレビの放送で行われるのでよく注意すること。

エ 非常持ち出し品を忘れないように。

オ 強風で危険物が飛んでくることがある。頭には、帽子、ヘルメットなどの防具をつけ、体はできるだけ衣類でおおう。

カ 浸水地域から避難するときは、長靴を避け、紐でしめられる運動靴等を使用する。

キ 嵐の中では、お互いの声がなかなか届かない。また、万一のときを考え、単独行動はさげ、責任者を中心に老人や子供を先にして、家族または隣近所そろって避難する。

## 資料 10-3 災害時における住民の心得

ケ 歩ける深さの目安は、男性では約70センチ、女性では約50センチ。決して無理をしない。  
水深が腰までになったら、避難は困難となる。早めの避難を心がける。

### (5) 台風下の行動について

- ア 外出する時は、目的、行き先、経路、帰宅予定時刻等を知らせておく。
- イ 塀のそばなどを通るときには、下敷きにならないよう塀から離れて歩くこと。
- ウ 道に沿って川や池がある場合は、風に吹きとばされないよう風上の側へ寄って通ること。
- エ 嵐の中では、お互いの声がなかなかとどかないので、指導員はメガホン、携帯用拡声機等を用意しておく。
- オ 夜間には、懐中電灯等が必要であるが、このような道具は、できるだけ身につけておく。
- カ 断線していたり、垂れ下がっている電線には、絶対に触らない。
- キ 浸水した屋内配線、電気器具等は危険なため使用しない。

## 第2 土砂災害に対する心得

### 1 土砂災害の原因

土砂災害は、地すべり、がけ崩れ、土石流の3つに大別される。

地すべりは、地下水などが粘土のような滑りやすい地層にしみこんで、その影響で地面が動き出す現象である。

がけ崩れは、長雨や集中豪雨などにより、斜面が突然崩れ落ちる現象である。

土石流は、長雨や集中豪雨などにより、山や川の石や土砂が、水と一体となって一気に下流へ流れる現象である。

台風や集中豪雨、地震などが災害発生の直接の引き金となる。

### 2 土砂災害の予防と予知

被害を最小限に抑えるためには、一人ひとりが気象情報などに注意し、早めに避難することが大事である。特に次のような前ぶれに注意する。

#### (1) 地すべり

- ア 地面にひび割れができる。
- イ 井戸や沢の水がにごる。
- ウ がけや斜面から水が吹き出す。

#### (2) がけ崩れ

- ア がけからの水がにごる。
- イ 地下水や湧き水がとまる。
- ウ 斜面のひび割れ、変形がある。
- エ 小石が落ちてくる。
- オ がけから音がする。
- カ 異様なにおいがする。

#### (3) 土石流

- ア 山鳴りがする。
- イ 雨が降り続けているのに川の水位が下がる。
- ウ 川がにごったり、流木が流れる。

### 第3 火災に対する心得

#### 1 普段の心得

災害時には消火活動も困難になる。災害時に火災を出さないよう、日ごろから次の点に注意する。

- (1) ガスこんろやストーブなど火を使う器具の周りには、燃えやすい物を置かない。
- (2) ストーブの持ち運びや給油は、必ず火を消して行う。
- (3) 天ぷらを揚げているとき、電話や応対に出るときは必ずいったん火を消す。
- (4) こんろの火やライター・仏壇のろうそくの火などが着ている服に燃え移る火災が増えている。「炎」には十分注意する。
- (5) 寝たばこはしない、させない。
- (6) 吸い殻は、くずかごなどに捨てない。
- (7) 電気コードからの火災に注意する。コードをたばねない。たこ足配線をしない。コンセントの差込口にほこりをためない。コードの上に重いものを乗せない。
- (8) 出火原因のトップは放火。家の周りに新聞紙などの燃えやすいものは置かない。
- (9) マッチやライターは、子供の手の届くところに置かない。
- (10) 外出するときや、寝るときは、火の始末を確認する。
- (11) ガス漏れや火災を早く発見するために、ガス漏警報機や火災警報機を備える。
- (12) 防災訓練に参加し消火器の使い方や消火要領を体験する。

#### 2 火災発生時の心得

- (1) 火を出したり、見つけたら、とにかく大声で近所へ知らせ、協力を求める。
- (2) 消防機関への通報は、局番なしの119番、落ちついて正確な情報を伝える。  
「火事です。市町丁目番号氏名です。」
- (3) みんなで協力して初期消火を行う。炎が天井に燃え移ったときは避難する。

#### 3 焼死事故をなくすための心得

- 火災から命を守る10のポイント -

- (1) 寝たばこはしない、させない。
- (2) 高齢者や病気の人、幼児だけを残して外出しない。
- (3) 方向の異なる2つ以上の逃げ道を決めておく。
- (4) 寝具等はできるだけ防災製品を使う。
- (5) 火災を出したり、発見したら、大声で周りの人に協力を求める。
- (6) 服装や持ち物にこだわらず、できるだけ早く避難する。
- (7) 煙の中を避難するときは、できるだけ早く避難する。
- (8) 煙の中を避難するときは、できるだけ姿勢を低くする。
- (9) いったん逃げだしたら、再び元に戻らない。
- (10) 逃げ遅れた人がいたら、近くの消防隊にすぐ知らせる。

#### 4 火災警報発令時の心得

- (1) 山林、原野において火入れをしない。
- (2) 屋外において花火、火遊びまたは焚き火をしない。
- (3) 屋外においては、引火性又は爆発性の物品その他の可燃物の付近で喫煙をしない。
- (4) 残り火(たばこの吸い殻を含む) 取灰又は火粉を始末する。
- (5) 屋内において裸火を使用するときは、窓、出入口等を閉じて行う。

第4 大雪に対する心得

1 家庭の心得

- (1) 気象情報に十分注意する。
- (2) 火の元に十分注意すること（火災の場合、消防車の到着が遅れ、消火活動が不可能な場合がある。）
- (3) 食料を余分に準備しておく。
- (4) 停電に備えて懐中電灯、ラジオ、予備の電池等を用意する。
- (5) 適宜に屋根の雪おろしを行う。
- (6) 雪崩れの危険地域に住んでいる人は、早めに避難するか、防護柵を設ける。
- (7) 出入口付近の屋根に、雪が滑り落ちないように滑り止を設ける。

2 通勤通学者の心得

- (1) 交通機関が乱れがちであるから、交通情報に注意し、通勤通学は時間の余裕を持つこと。
- (2) 自動車にはチェーンまたは冬用タイヤをつけること。チェーン、冬用タイヤの無い時は、車を運転しないこと。
- (3) 雪道、階段等はすべりやすいので注意すること。
- (4) 各事業所においても極力交替体制をとるなど交通混雑の緩和に協力することが望ましい。